

れない」が約二割であるという。また「僧侶がこの商品を積極的に仏教信者に勧めているが、それは宗教的なことよりも経済的な理由で、寺を指定して未来の利益を保障するものだからである」との見解が聞けた。

「預修齋」は、寺の行事として閏月に行われている。筆者はソウルの奉元寺（太古宗）の預修齋に参加した。平日、朝から夕方まで続いたその儀式の参加者（約三〇〇人）は、ほとんどが女性であった。生前に功德を積んであの世に振り向けるという伝統に則った儀礼であったが、参加者へのインタビュでは、儀式本来の意味ではなく、健康祈願、就職、出世祈願など現世利益的な参加理由が返ってきた。そこには、儒教、巫俗、キリスト教、仏教が混在する宗教的多元性ゆえの韓国仏教における宗教的「寛容」がみてとれた。

パネルの主旨とまとめ

池上良正

「死者（ヒト以外の対象も含めて）を供養する」という言葉によって、多くの日本人は現在でも一定のイメージを共有し、その意味概要を理解し合うことができる。しかし、「死者供養」と総称される事象の歴史的形成過程や文化的な広がり、さらにはその現代の変容を学術的な視点から探ろうとすると、いずれも複雑な要因が絡み合っており、簡単な説明を許さない。本パネルは、平成一九―二一年度科研費『「供養の文化」の比較研究を

とおして見る『死』の表象の形成過程とその現代の変容』という共同研究の中間報告を兼ねて、「死者供養文化」の奥行きと広がり明らかにすることを目的とした。

当日は発表者による発題の後、中村生雄がコメンテータをつとめた。中村はまず、この共同研究の基本的な課題として、（一）日本における民俗宗教的な死者儀礼をささえる霊魂観や死後イメージの特徴を「供養の文化」という文化類型のもとに把握し、その歴史的・宗教思想的な形成過程を東アジア世界との比較研究を通して解明する、（二）今後の日本社会の動向においてそれがどのような意義と問題点をもつものであるかを、とりわけ現在大きく変容しつつある「死」の表象の行方を問うことを通じて、学際的・領域横断的に明らかにする、という二点を挙げ、本パネルの四名の発表が、それぞれ思想史、歴史学、宗教学、社会学の関心と方法に従って展開された意義を強調した。さらに、自らの闘病生活の体験や、空前のヒット曲となった「千の風になって」をめぐる昨今の議論、映画「おくりびと」の流行現象などに触れつつ、「供養の文化」を推進する主体が、供養される側（死者）から供養する側（生者）へと決定的に移行してしまったという大きな地殻変動を指摘したうえで、個々の発表に対する感想と質問を述べた。

佐藤の発表に対しては、天皇の現人神信仰に典型的なヒトガミ信仰に見られるような、血縁上の先祖を葬り祀る死者供養のあり方と、血縁につながらないいわゆる「祟り神」の祭祀とはどういう関係にあったのか、という質問がなされた。松尾の発表に対しては、弥勒下生で弥勒の説法にあずかるのは、肉体を

パネル

失った靈魂だったのか。中世の葬送儀礼、とりわけ律僧の靈魂觀念のなかで、靈肉關係はどのように理解されていたのか、といった質問がなされた。岡田の発表に対しては、韓国での動物慰靈行事に対する仏教、儒教、キリスト教それぞれの反応について質問がなされた。井上の発表に対しては、現在大きく変化している韓国社会の葬礼文化との関連において、預修斎や四十九斎の担っている意味について質問がなされた。

その後、フロアの参加者からも、いくつかの貴重なコメントや質疑が出された。佐藤の発表に対しては、「カミになる」というヒトガミ信仰と、「カミにする」という「供養の文化」との間には断絶があり、ストリートにはつながらないのではないかと、松尾の発表に対しては、死者供養文化の形成における大きな枠組みとしては、密教が果たした役割が重要ではなかったか、といった質問が出された。また岡田の発表に対しては、実験動物供養と、献体された死者、ペットをはじめ蚕や食品など有用動物の供養との類似や差異について、井上の発表に対しては、韓国における四十九斎につづく年忌法要の現状や、死者供養とグリーンフワークとの関連などについての質問があり、活発な意見交換が行なわれた。

発表者の応答については割愛するが、これらの質疑は、今後の個別研究や共同研究の進展に生かされるはずである。「死者」を視野に入れた生活世界の再構築は、重要な今日的課題であり、「死者供養」を単に仏教文化の付随現象のひとつとしてではなく、宗教学が取り組むべき「救済」のテーマとして位置づけていく視点も重要になるであろう。

宗教間対話の思想

——歴史的諸相とそれらの対話——

代表者・コメンテータ・司会 八巻和彦

ノージャンのギベールとイスラーム

矢内義顕

一二世紀初頭、北フランスのノージャン修道院長ギベール（一〇五五年頃—一二二五年頃）は、第一回十字軍（一〇九六年—九九年）の歴史を記述した『フランク人を通してなされた神の業』（*Dei Gesta per Francos*）の第一巻で、「聖なる戦争」（*prelia sancta*）の思想、東方教会の墮落という誹謗・中傷、そして異端者ムハンマドの断罪を展開することにより、フランク人を中心としたエルサレムへの軍事的な遠征を正当化する。その特徴の幾つかを挙げよう。

第一に、本書の中には、宗教間対話の思想はおろか東西教会の対話という思想もまったく見出されない。そこで展開されるのは十字軍遠征を「聖なる戦争」として正当化する思想である。一〇五四年の東西教会の断絶は、この著作にも色濃く影を落としている。ギベールは東方教会の教理的・倫理的墮落と政治的な荒廃を断罪し、この墮落に対する神の罰としてムハンマドが登場したと考える。それゆえ、この異端に苦しめられる東方教会を救い、聖地エルサレムを奪回するために、教理的・倫